

研究報告

山村における郷土愛に結びつく背景の検討

— 日本とオーストリアの山村を事例にした比較から —

太田 和利・宮崎 清之
NPO法人南アルプス研究会

A Study on the Background Relating to the Inhabitants' Attachment
to Their Birthplace in the Mountains:
Comparison between Two Case Studies of Mountain
Villages Conducted in Japan and Austria

Kazutoshi OHTA and Kiyoshi MIYAZAKI
The Southern Alps Research Society, NPO
(受理日2007年2月14日)

Key words: attachment to one's birthplace, education to promote a better understanding of the local community, Gemeinde Obernberg, Hase village

1 背景および目的

山村の維持については、ただ単に一次生産の場という意味だけでなく、国土保全の意味で、また、風景や伝統的文化の継承という意味から、その重要性が認識されるようになってきた。そして、こうした状況を背景として、各地で村づくりの取り組みが行われている。

ところで、我が国の山村政策には、ヨーロッパ諸国の政策をモデルにしている場合が見られる。そのため、過疎問題など山村に関する研究では、国内のみならず国外を対象にした事例も多く、ヨーロッパ・アルプスの牧場や草地の風景とその維持について注目する意見もある（例えば、松田1998）。

一方、環境教育の分野では、村づくりを環境教育として位置づけている。例えば、日本環境教育学会の機関誌である「環境教育」を見ると、28号の「特集 食と農をめぐる環境教育（その1）」では、野村（2004）が地域から食農を考えることによって持続可能な地域づくりにつながる提案を行

い、藤本（2004）は、食と農の学習が地域を見直し地域文化を継承し、まちを愛することにつながると報告している。いずれにせよ、これらの論考の背景には、地域づくりのためには、住民が地域を理解し地域に誇りを持つことが不可欠であり、地域づくりが環境保全につながるという認識があると見てよい。

このような知見から判断すると、地域の子どもに対して郷土愛を高める教育は、地域づくりや地域の環境保全にとって重要な意味を持つと考えられる。この考えに基づいて、本研究では二つの山村を事例にして、山村の子どもに対する地域を理解し誇りを持たせる教育（以下、地域理解教育という）について考察することを目的にした。対象にした二つの山村の一つは、これまでに研究対象としてきた過疎山村の長野県長谷村とした。もう一つは、ヨーロッパでは小規模な山村であっても人口が維持されている事例が多く、また、オーストリア・チロル地方を対象にした山村研究の蓄積が多いことから、チロル州の小規模山村の一つであるオーバーンベルク村（Gemeinde Obernberg）

問い合わせ先 E-mail: ko-alps@janis.or.jp

とした。

2 先行研究の概観

長谷村については、長谷村に拠点をおくNPO法人南アルプス研究会が、村づくりに関するさまざまな調査・研究・提言を行ってきた（例えば、太田 2004、久保田 2005）。

チロルについては以下のようなものである。呉羽（2001）は、補助金によって農業が維持され、それが観光資源としてグリーン・ツーリズムに利用され、地域に対する誇りを高めることになっていることを明らかにした。岡崎（2001）は、伝統的な小規模ゲマインデリにより地域の求心力が維持され、住民が村での生活を高く評価し、集落景観や家屋様式に共通の指向があることを明らかにした。池永（2000）は、チロルの山地農民が郷土の風景や伝統文化に誇りを持ち、伝統的家畜飼養によりアルム（Alm）や集落周囲の草地を維持することで、景観維持や雪崩・土石流等の自然災害の防止に寄与していることを明らかにした。

しかし、いずれの場合も地域理解教育や住民の郷土愛の要因に関する研究事例はない。

3 対象地の概要と研究の位置づけおよび方法

3.1 対象地の概要

長谷村は、長野県南東部、南アルプス山麓の谷間に展開している。2005年版村勢要覧によれば、8地区35集落から成り立ち、面積は321km²と広大であるが、可住面積は13%程度にすぎない。また、2000年国勢調査によれば、人口2,228人、若年者比率13.7%、高齢者比率38.2%、人口減少率52.1%（対1960年比）の過疎高齢山村である。

オーバーンベルク村は、インスブルックの南方約40km、イタリア・南チロルに接し、オーバーンベルク谷の標高1,400m前後に展開している。統計資料（Beatrix und Egon Pinzer 2002）によれば、長谷村とは対照的に、面積38.7km²、人口361人と小規模であるが、1950年以降、人口は約320人から約360人の間で安定的に推移している。主産業は牧畜で、アルムが22.2km²（57.5%）を占め、美しいアルプス山村風景を作り出している。

アルムはアルプ（Alp）とも呼ばれ、森林限界の標高2,000m前後に展開する共有の草地であり、そこでは、夏期の間、牛や羊が放牧され、作り出される風景は重要な観光資源となっている。実際、観光パンフレット（「Wipptal」）によれば、国内はもとよりドイツを中心とした国外のグリーン・ツーリズム客向けに、農家民宿24戸、153ベッドが用意されている。

3.2 研究の位置づけおよび方法

以上のように、両村はともに谷間に位置する山村であるが、オーバーンベルク村は長谷村に比較して生活条件が厳しく小規模であるにもかかわらず人口が維持されている。また、すでに述べたように、対象地域において、子どもに対する地域理解教育や、住民が地域に対して誇りを持つようになる要因について言及された先行研究は見当たらない。これらのことを踏まえ、本研究は、住民の自然や地域に対する意識、生活実態などから両村を比較して、地域理解教育について考察しようというものである。

具体的には、①自然に対する大人の意識、②地域に対する大人と子どもの意識、③学校における地域理解教育、④伝統文化の継承の4点について、両村の差異を比較し、子どもに対する地域理解教育を考察する。そのために、以下のように、アンケート調査、資料の収集、聞き取り調査を行ったが、すでに行われた意識調査結果も考察に利用した。

長谷村の場合は、次のとおりである。「自然に対する意識」については、1992年に行った住民に対する意識調査結果（太田 1993）を用いた。「地域に対する意識」については、2005年12月に長谷村唯一の学校である長谷小中学校の児童・生徒を対象にアンケート調査を行った。長谷小学校では、4年生12名、5年生15名、6年生16名の計43名、長谷中学校では、1年生19名、2年生19名、計38名、合計81名を対象にした全数調査とした。また、大人については、長谷村が1999年に「第3次長谷村総合振興計画」の策定のために実施した住民意識調査結果の中から、今回の調査結果と比較できる質問項目を選定した。1992年と1999年のデ

表1 回答者の性別・年齢別構成

	区分	性別			合計	年齢別							不明	合計
		男	女	不明		10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上			
1992年 住民 意識調査	人	242	41	5	288	1	2	17	37	68	162	1	288	
	%	84.0	14.2	1.7	100.0	0.3	0.7	5.9	12.8	23.6	56.3	0.3	100.0	
1999年 住民 意識調査	人	255	247	10	512	13	50	50	70	89	225	16	512	
	%	49.8	48.2	2.0	100.0	2.5	9.8	9.8	13.7	17.2	43.9	3.1	100.0	
2005年 小中学生 意識調査	人	42	39	0	81	15	20	15	18	12	0	1	81	
	%	51.9	48.1	0.0	100.0	18.5	24.7	18.5	22.2	14.8	0.0	1.2	100.0	
2002年 親・祖父 母意識調査	人	18	12	0	30	0	0	13	9	3	1	4	30	
	%	60.0	40.0	0.0	100.0	0.0	0.0	43.3	30.0	10.0	3.3	13.3	100.0	
2003年 親・祖父 母意識調査	人	11	17	0	28	0	1	14	6	2	5	0	28	
	%	39.3	60.7	0.0	100.0	0.0	3.6	50.0	21.4	7.1	17.9	0.0	100.0	
2003年 小中学生 意識調査	人	12	8	0	20	14	0	0	1	2	3	0	20	
	%	60.0	40.0	0.0	100.0	70.0	0.0	0.0	5.0	10.0	15.0	0.0	100.0	

・長谷村の1999年の数値は、長谷村から提供していただいた調査結果に基づいて筆者の責任で記載した。

ータはいずれも古いものであるが、傾向を知るためには十分だと判断した²⁾。「地域理解教育」については、長谷小中学校から資料の提供を受けた。その他、村役場からも資料の提供を受けた。

オーバーンベルク村の場合は、次のとおりである。「自然に対する意識」については、2002年10月にオーバーンベルク村の小中学生³⁾の親・祖父母を対象にアンケート調査を行った。この質問項目は、1992年の長谷村での調査に沿って設定した。「地域に対する意識」については、2003年11月に、オーバーンベルク村の小中学生とその親・祖父母を対象にしてアンケート調査を行った。ここで、オーバーンベルク村の小中学生は14名、中学生は6名であり、中学生はグリース中学校へ通っている。また、2002年の調査で対象にした親・祖父母と2003年の調査で対象にした親・祖父母は完全に一致しているわけではない。「地域理解教育」については、オーバーンベルク小学校から資料の提供を受けた。その他、村役場からも資料の提供を受けた。これらの調査は、第二著者の宮崎によって現地で行われた。

また、「伝統文化の継承」については、長谷村の中尾歌舞伎とオーバーンベルク村のムズィーク・カベレ（楽団）を比較した。

なお、ドイツ語版の調査票の作成では、質問項目のドイツ語訳に十分配慮した⁴⁾。回答者の性別・年齢別構成を表1に示した。

4 結果

意識調査では、オーバーンベルク村のサンプル数が少なく、統計的検討を十分行えないことから、あくまでも推定にとどめた。なお、対象者である小中学生については「子ども」、親・祖父母・一般住民については「大人」と表記する。

4.1 自然に対する意識の比較

回答結果は表2のとおりである。

Q.1“行きたい旅行先”の結果を見ると、長谷村では“古い寺院”や“見晴らしのよい山”という回答が多かったのに対して、オーバーンベルク村では“高原の牧場”が多かった。回答のばらつきを見ると、長谷村の方が大きいことが認められた。また、オーバーンベルク村でのみ質問したQ.8“森の中の散歩”では、回答者全員が“好き”と回答した。

Q.2“古い木に対する神々しい気持ち”、Q.3“森の中での神秘的な気持ち”、Q.6“日の出・日没を見たときの気持ち”、Q.7“山川草木と霊”は、自然に対する畏敬の念を尋ねた質問である。結果を見ると、両村の住民は自然に対して畏敬の気持ちを持っているが、“山川草木と霊”については、長谷村の方が強い傾向にあると推測できた。

Q.4“好みの自然”、Q.5“森林の維持と人手”の結果からは、オーバーンベルク村の方が、人手の加わった自然を好み、森林を維持していくために

表2 自然に対する意識

Q.1 行きたい旅行先(%) (択一回答)						
	①深い森	②古い寺院	③広い砂浜	④高原の牧場	⑤見晴らしのよい山	
オーバーンベルク村	10.0	0.0	10.0	43.3	13.3	
長谷	5.2	19.1	5.6	9.7	23.6	
⑥険しい山 ⑦静かな湖 ⑧その他 不明・非該当 合計						
オーバーンベルク村	16.7	3.4	0.0	3.3	100.0	
長谷	0.7	19.8	6.9	9.4	100.0	
Q.2 古い木を見たとき神々しい気持ちを抱くか(%) (択一回答)						
	①抱く	②抱かない	不明・非該当	合計		
オーバーンベルク村	80.0	20.0	0.0	100.0		
長谷	89.9	9.7	0.3	99.9		
Q.3 森の中に入ったとき神秘的な気持ちを抱くか(%) (択一回答)						
	①抱く	②抱かない	不明・非該当	合計		
オーバーンベルク村	73.3	26.7	0.0	100.0		
長谷	91.0	8.3	0.7	100.0		
Q.4 人手の加わった自然とありのままの自然とではどちらが好きか(%) (択一回答)						
	①人手の加わった自然	②ありのままの自然	③どちらともいえない	不明・非該当	合計	
オーバーンベルク村	96.7	3.3	0.0	0.0	100.0	
長谷	50.0	32.3	17.0	0.7	100.0	
Q.5 森林を美しくするために人手を加えるべきか(%) (択一回答)						
	①加えるべきだ	②加えるべきでない	③どちらともいえない	不明・非該当	合計	
オーバーンベルク村	90.0	10.0	0.0	0.0	100.0	
長谷	70.5	16.3	11.8	1.4	100.0	
Q.6 日の出や日没を見たとき、あらたまった気持ちになるか(%) (択一回答)						
	①なる	②ならない	不明・非該当	合計		
オーバーンベルク村	100.0	0.0	0.0	100.0		
長谷	84.4	13.9	1.7	100.0		
Q.7 山や川、草や木に登が存在すると思うか(%) (択一回答)						
	①思う	②思わない	不明・非該当	合計		
オーバーンベルク村	36.7	63.3	0.0	100.0		
長谷	47.6	51.0	1.4	100.0		
Q.8 森の中を散歩するのが好きか(%) (択一回答)						
	①好き	②さらい	③どちらともいえない	不明・非該当	合計	
オーバーンベルク村	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	
長谷	-	-	-	-	-	

・長谷村のデータは1992年調査より引用した。

・Q.8は長谷村の調査では質問されなかった。

・%の数値は四捨五入したため、合計が100%にならない場合がある。

は人手を加えるべきだと考える住民が多いと推測できた。

以上のことから、オーバーンベルク村の住民は長谷村の住民よりも日常的な自然との関わりが深く、実体験に基づいた自然意識になっていることが示唆された。

4.2 地域に対する意識と生活の比較

まず、表3に示した子どもの回答結果を見ていく。Q.1“村に対する誇り”では、両村いずれも“誇りを持っている”という回答が多く、とくに、オーバーンベルク村の方で強いと推測できた。しかし、Q.2“誇りに思うこと”では、両村で違いが認められた。すなわち、長谷村では、抽象的な“自然が豊か”という回答が多かったのに対して、

オーバーンベルク村では、“すばらしい山”(die wunderbar Berge)、“美しい風景”(die sch?ne Landschaft)というように、形容詞つきの具体的な回答が多かった。同様に、Q.3“不満なこと”についても、両村には違いが見られた。すなわち、長谷村では、“店がない”という回答が多かったのに対して、オーバーンベルク村では少なかった。なお、長谷村では“テニスコートがない”という回答が多かったが、これは、長谷中学校には生徒数の関係でテニス部しかないためだと考えられる。また、Q.7“将来村で暮らしたいか”については、両村いずれも肯定的な回答が多かったが、オーバーンベルク村の方で強い傾向が認められた。

生活面を見ると、Q.4やQ.5の“村の歴史や文

表3 地域に対する意識と生活(子ども)

Q.1 村に誇りを持っているか(%) (7段階評定)									
	非常に持っている	持っている	まあまあ持っている	どちらともいえない	あまり持っていない	持っていない	まったく持っていない	不明・非該当	合計
長谷	18.5	33.3	22.2	13.6	2.6	1.2	2.5	6.2	100.0
オーバーベルク	90.0	5.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
Q.2 村の何を誇りに思うか(人)(自由回答)									
長谷	自然が豊か(39) 山(16) 人間関係(14) 空気(16) 孝行娘(4) 水(3) 歴史(3) 森林(2) 熱田神社(2) 川(2)								
オーバーベルク	山(9) 風景(7) オーバーンベルク湖(4) 友人(3) 散策路(3) 空気の(3) 教会(3) 農家(3) 静寂(3) 自然(2) スキーリフト(2)								
Q.3 村の生活で不満なこと(人)(自由回答)									
長谷	店がない(26) テニスコートがない(11) 街灯がなく暗い(8) 遊ぶ場所が少ない(5) 駅が多い(4) 交通が不便(4) 人口が少ない(3) 工事が多い(3) 合併(2) 寒い(2) 下着音が出る(2)								
オーバーベルク	サッカー場がない(5) 店がない(2) プールがない(2) スポーツ施設がない(2) 就労場所がない(2)								
Q.4 親・祖父母から村の歴史や文化について教えてもらうことがあるか(%) (5段階評定)									
	いつも	時々ある	たまにあめった	まったく	不明・非	合計			
長谷	12.3	19.5	35.8	17.3	12.3	2.5	100.0		
オーバーベルク	0.0	10.0	50.0	15.0	25.0	0.0	100.0		
Q.5 学校で村の歴史や文化について学ぶことがあるか(%) (5段階評定)									
	いつも	時々ある	たまにあめった	まったく	不明・非	合計			
長谷	17.3	32.1	12.0	7.4	1.2	0.0	100.0		
オーバーベルク	30.0	25.0	35.0	0.0	10.0	0.0	100.0		
Q.6 学校が休みの日や学校から帰ったらどんな遊びをしているか(人)(自由回答)									
長谷	ゲーム(26) テレビ(14) テニス(13) 外遊び(11) 野球(10) 犬の散歩(5) パソコン(5) 自転車(4) 買い物(3) 散歩(3) ごろごろしている(3) カード(3) サッカー(2) 読書(2) ままごと(2) お絵かき(2) 一輪車(2)								
オーバーベルク	スキー(7) サッカー(6) 自転車(5) 外遊び(4) ルージュ(4) チェス(3) スケート(3) パソコン(3) ドミノ(2) マウマウ(2) ボブスレー(2)								
Q.7 大人になっても村で暮らしたいと思うか(%) (7段階評定)									
	非常に思う	思う	まあまあ思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	まったく思わない	不明・非該当	合計
長谷	7.4	23.5	23.5	34.6	4.9	2.6	3.7	0.0	100.1
オーバーベルク	25.0	55.0	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
Q.8 家族でハイキングやピクニックに行くことがあるか(%) (7段階評定)									
	毎日	週2-3回	週1回	月2-3回	月1回	めったに	まったく	不明・非	合計
長谷	-	0.0	2.5	4.9	12.3	43.2	37.0	0.0	99.9
オーバーベルク	0.0	15.0	20.0	45.0	0.0	15.0	5.0	0.0	100.0

・四捨五入のため合計値が100%にならない場合がある。

・自由回答では、2名以上回答した項目についてのみ記載した。

・Q.8の選択数の「毎日」は長谷村では設定しなかった。

化”については、家庭よりも学校で学ぶ機会の方が多いと推測できた。Q.6“遊び”については、長谷村では“ゲーム”や“テレビ”という回答が多かったのに対して、オーバーンベルク村ではそれらは皆無で、外で遊ぶ傾向が認められた。また、Q.8“ピクニック・ハイキング”については、長谷村ではほとんど行われていないことが認められた。

次に、表4に示した大人の回答結果を見ていく。長谷村のデータとして、1999年の住民意識調査の中から本研究での調査項目と比較できる4項目を取り上げた。Q.1“長谷村は住みよい村か”およびQ.2“将来村に残りたいか”については、いずれも肯定的評価が60%を越えた。しかし、回答者の44%が60歳以上であることを考慮しなければなら

ない。今回用いた資料では明らかにされていないが、「村づくり委員会」の住民意識調査報告1994年版によれば、同様の質問で、“村に残りたい”という回答は、全体では52%であるが、10歳代では20%、20歳代では17%、30歳代では30%というように若年層では低下した。また、Q.3“長谷村のよい点”として、“豊かな自然”が32%ともっとも多く回答され、Q.4“長谷村の悪い点”として、“就労場所の不足”が約25%ともっとも多く回答された。

他方、オーバーンベルク村については、以下のとおりである。Q.1“村に対する誇り”では、約80%が肯定的に回答し、Q.2“誇りに思うこと”では、“風景”や“静寂”が多く、ただ単に“自

表4 地域に対する意識と生活(大人)

		Q.1 長谷村は住みよい村だと思うか(%) (択一回答)								
		住みよい	どちらかという 住みよい	どちらかという 住みにくい	住みにくい	どちらと もいえない (無回答を含む)	その他 (無回答を含む)	合計		
		29.9	34.4	12.9	4.7	16.1	1.8	100.1		
		Q.2 将来長谷村に残りたいと思うか(%) (択一回答)								
		残りたい	機会があれば 残りたい	どちらとも いえない	わからない	不明(無回答を含む)		合計		
長谷村		61.7	17.6	15.6	4.3		0.8	100.0		
		Q.3 長谷村のよい点は何か(%) (12項目から3項目選択)(上位5項目)								
		豊かな自然	健康にいい	公害がない	人情味豊か	安全な村				
		32.0	15.5	13.1	12.1			10.1		
		Q.4 長谷村の悪い点は何か(%) (12項目から3項目選択)(上位1項目)								
		就労場所の不足	買い物・通勤が不便	交通の便が悪い	文化的施設不足					
		21.5		21.8	21.2			10.6		
		Q.5 村に誇りを持っているか(%) (7段階評定)								
		非常に持っている	持っている	どちらとも いえない	持っている	持っている	まったく 持っていない	不明・非 該当	合計	
		35.7	32.1	10.7	10.7	7.1	0.0	3.6	0.0	100.0
		Q.6 村の何を誇りに思うか(人)(自由回答)								
		風景(16)	静寂(4)	空気がいい(5)	教会(5)	山(5)	学校(3)	雰囲気(3)	自然(3)	
		公民館(2)	オーバートンベルク湖(2)	水(2)						
		Q.7 村の生活で不満なこと(人)(自由回答)								
		店がない(11)	スポーツ場がない(3)	サッカー場がない(3)	余暇施設がない(2)					
		公共交通が不便(2)	プールがない(2)	長い冬(短い夏)(2)						
		Q.8 子供に村の歴史や文化を伝える必要があるか(%) (7段階評定)								
		非常に必要	必要	まあまあ 必要	どちらと もいえない	あまり必要 でない	必要ない	まったく 必要ない	不明・非 該当	合計
オーバーンベルク村		35.7	12.9	17.9	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
		Q.9 子供に村の歴史や文化を伝える努力をしているか(%) (7段階評定)								
		非常に努力 をしている	努力している	まあまあ 努力している	どちらと もいえない	あまり努力 していない	まったく 努力していない	不明・非 該当	合計	
		7.1	35.7	32.1	7.1	7.1	3.6	0.0	7.1	100.0
		Q.10 子供に村に残って欲しいか(%) (7段階評定)								
		非常に思う	思う	まあまあ 思う	どちらと もいえない	あまり思 わない	思わない	まったく 思わない	不明・非 該当	合計
		21.4	39.3	7.1	17.9	0.0	10.7	0.0	3.6	100.0
		Q.11 家族でハイキングやピクニックに行くことがあるか(%) (7段階評定)								
		毎日	週2-3回	週1回	月2-3回	月1回	めったに ない	まったく ない	不明・非 該当	合計
		3.6	10.7	32.1	25.0	3.6	17.9	7.1	0.0	100.0
		Q.12 村を存続させるための条件は何か(人)(自由回答)								
		住宅建設(用地確保)(6)	観光振興(7)	店を増やす(6)	駐車場を増やす(5)	社会福祉整備(3)	公共交通整備(3)	学校・幼稚園整備(3)	余暇センター設置(2)	
		人口増(2)	子供を増やす(2)	共同団体化(2)	苦者のための施設整備(2)	道路整備(2)	集落計画(2)			

・長谷村のデータは1999年に長谷村によって行われた住民意識調査結果である。

然”という回答は少なかった。このような回答傾向は、子どもと同様に具体的だった。Q.3 “不満なこと”では、長谷村と異なり、“就労場所の不足”という回答は1名だけで、グリーン・ツーリズムが農家の経済的な支えになっていると推測できた。

また、Q.6 “子どもに村に残って欲しいか”では、約70%の人が肯定的に回答し、Q.4やQ.5の“村の歴史や文化”では、多くの人が必要性を認め努力をしている様子が窺われた。そして、Q.7 “ハイキング・ピクニック”は、かなりの頻度で行われていると推測できた。さらに、Q.8 “村を存続させるための条件”として、“住宅建設”や“観光振興”が多く回答され、景観保全と住宅地の確保の

両立の難しさが示唆された。

以上のことから、大人でも、その影響を受けた子どもでも、村に対する評価は、長谷村に比べオーバーンベルク村の方が肯定的だと推測できた。また、両村とも自然環境に誇りを持っているものの、オーバーンベルク村の方がより具体的で、遊びや家族団らん、経済基盤としても自然を利用しており、とくに、グリーン・ツーリズムは、村の重要な経済基盤になっていると推測できた。さらに、オーバーンベルク村の子どもは“ゲーム”ではなく外で遊ぶ傾向にあり、長谷村の子どもは“店がない”ことに不満を持っており、商品経済の影響を受けていると推測できた。

表5 長谷小中学校の地域理解教育に関する実践例とオーバートンペルク村の「ダホアム」

学年等	教科等	目的	内容
1-2年	生活科	①「長谷村たんけん」というテーマで地域の自然に親しむ ②公共施設の見学	①親水公園・白山公園・鹿公園などで遊ぶ ②給食センター・郵便局の見学
3年	社会科	公共機関の見学 ・村の産業に関係する「よもぎとり」をとおして、勤労の大切さや充実感にふれるとともに、地域の自然に親しむ ①よもぎとり ・老人クラブとの共同作業をとおして、お年寄りの知恵や技術を学ぶ ・お年寄りとの交流会をとおして、お年寄りの村や子供に寄せる思いを知り、地域のお年寄りを大切にする心を育てる	役場・ケーブルテレビ局・警察官駐在所の見学 ・「よもぎとり」は休憩を含めて約2時間実施 ・お年寄りとの交流は30分(肩たたき、ゲーム、歌の発表)
長谷小学校	児童会・学年の集会 ②孝行猿の集まり	郷土に伝わる文化的遺産に心を寄せ、その心を理解し、郷土愛を育てる	・人形劇による発表(3年) ・地域住民による紙芝居 ・孝行猿の歌 ・低学年：臼分分校跡、非持山七面堂 ・中学年：孝行猿資料館、墓 ・高学年：北沢峠、仙水峠
	③遠足	身近な地域を歩き、自然・施設・史跡にふれる	・峰川支流の黒川での飯ごう炊さんや川遊び ・タイヤチューブやペットボトルを使った遊び ・カレーライス作り
	④川の学校	①企画・運営力の育成(実行委員会) ②生活体験力をつける(自分たちの方で食事を作る) ③自然体験をさせる(外で遊ぶことが少ない)	①地形図の見方(地理記号、等高線など) ②地形を読み取る(土地利用、地形のようす) ③村勢要覧から長谷村の風をよとらえる ・人口の推移、構成(高齢化、人口減少など) ・産業別人口の推移(農林業人口の減少) ・工業の推移(事業所数は6、従業員数の減少)
長谷中学校	1年 社会科(地理)	【単元名：身近な地域の調査】 身近な地域の地理的事象のなかから、いくつかの事象を見出し、観察・調査などの活動を行い、地域に対する理解と関心を深めさせるとともに、中町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表方法の基礎を身につけさせ、この後の都道府県の調査につなげる	④テーマ別グループ学習(調査方法、まとめ方) ・長谷村の人口 ・長谷村の降水量 ・長谷村の農業 ・長谷村の文化財 ・美和ダムおよびバイパストンネル** ⑤テーマごとに調査学習(調査方法、まとめ方) ・インターネット、文献の活用 ・住民インタビュー ⑥発表(発表の聞き方、まとめ方)

巻	総頁数	タイトル	内容	発行年
1	28	方言	ヴィンツタール上流域の方言	1991
2	44	古い出来事	ヴィンツタール上流域の古い出来事	1991
3	52	古い農家	ヴィンツタール上流域の古い(農家)の所有の変遷が示されている。オーバートンペルクの場合、101戸について所有の変遷が示されている。	1995
ダホアム	4	子どもたちの感情・意見	ヴィンツタール上流域の子どもたちの感情と意見：家族と友人、植物と動物、学校と教師、音楽と楽しみ、不安と恐怖、思慕・希望と自由、将来、夢、メルヘンと幻想	1996
	5	年代記その1	ヴィンツタール上流域の歴史的出来事の年代記録	不明
	6	年代記その2	1814年までの故郷の歴史研究報告	1997
	7	年代記その3	ブレンナー鉄道、グリーンツェーリズム、イタリヤ古領下のチロル、ナチス時代のチロル強制労働収容所とフェルスの秘密モリブデン鉱山、雪崩災害	1998

・長谷小中学校とオーバートンペルク小中学校から提供していただいた資料に基づき筆者の責任で作成した。
*1)民話の「孝行猿」は長谷村柏木地区が発祥とされ猿の墓と資料館がある。
*2)非持山地区にある玄立(げんりゅう)寺の裏地にあるお堂で貞良4(1697)年建立とされる。
*3)美和ダムは美和地区を流れる大竜川の支流の「峰川」にあり、1955年に本格着工、1956年に完成した。このダム建設は、長谷村の大規模人口流出の一因となった(大田 2000)。バイパストンネルとは、美和ダムの土砂堆積防止のための精砂トンネルのことである。

4.3 地域理解教育の比較

まず、長谷小中学校における地域理解教育を見ていく。平成17年度版長谷小学校学校要覧によれば、「学校像」として、「長谷の自然や文化・伝統・人材を活かした教育課程を実施し、感性豊かな子どもを育てる学校」、「郷土を誇りに思える子どもの育成を図る学校」などを掲げている。具体的には、「長谷村のよさを活かした体験的行事の実施」、「地域の方と結びついた行事や授業の実施」を取り入れ、表5に示したように実践している。

一方、平成17年度版長谷中学校学校要覧を見ると、直接的には地域理解教育に関する教育目標は設定されていないが、1年生では、村内の入笠山でのキャンプ、2年生では、村を象徴する山である南アルプス・仙丈ヶ岳への登山が行われている。また、教科学習では、表5に示したように、社会科の地理分野で地域を教材にした学習が行われている。しかし、提供していただいた指導案の考察には、「時間的に制約があり、長谷村の様子についてはある程度知ることができたものの、地域の将

来像や課題について、具体的に考え、提案していくまでには達しておらず、今後の課題であると記されている。

次に、オーバーンベルクの小中学生に対するダホアム (Dahoam) を用いた地域理解教育について見ていく。ダホアムとは、「わが家 (ふるさと)」という意味のチロル方言であり、近隣自治体による広域行政組織によって作られている。具体的には、ヴィップ谷全体の歴史や文化について、子どもも参加し調査したものをまとめたもので、子どもたちが描いたイラストも多数使われている。

オーバーンベルク小学校長のヴァルトナー氏からの聞き取りによれば、ダホアムは、オーバーンベルクのほか、近隣のグリース、シュムリン、ファルスの子どもたちに、地域の固有の方言と過去のできごとを理解させることを目的に、グリース中学校の教師と生徒によって作成され、子どもたちの教材であるだけでなく、地域のすべての住民のための記録としても使われているという。

以上のことから、オーバーンベルク村の小中学校におけるダホアムを教材にした指導案などの資料が入手できない中で、公平性という点で問題がないとはいえない比較であるが、オーバーンベルク村からは学ぶ点があると判断できた。ただし、5. 考察で詳しく述べるが、両村の宗教的背景や生活習慣の違いなどから、両村の地域理解教育の優劣を簡単に論じることはできないことを理解しておく必要があるだろう。

4.4 伝統文化の継承

山仕事を生業としていた長谷村中尾地区に歌舞伎が伝わったのは1700年代中頃であり、山仕事の無事息災を願う春の山神祭で演じられながら受け継がれてきた。2次大戦中に中断し、戦後一時復活したものの、昭和30年代に再び途絶えた。しかし、1986年春、村づくりには古いものを見直し伝統を残す必要があるとして、地区青年会により再復活された (久保田 2005)。以上のような経緯を持つ中尾歌舞伎は、地区を特徴づける最大のものであり、1998年には、活動の拠点となる「中尾座」が完成した。

中尾歌舞伎保存会会長の西村薺 (かがり) 氏か

らの聞き取りによれば、保存会の会員数は30名、春と秋の年2回公演を行っており、地区の助成と会費、企業の寄付によって運営されている。また、後継者の育成は小中学校での同好会が考えられるが、村に残る可能性が少なく具体的には行われていない。いずれにせよ、資金不足が最大の問題だという。

オーバーンベルク村では、吹奏楽団が継承されている。「オーバーンベルク楽団の175年」(Musikkapelle Obernberg 2003) によれば、楽団は1828年に設立され、二度の大戦でも途絶えることなく活動を継続してきた。2003年の団員数は55名で、年間約25回の公演を行っており、公的援助のほか寄付により維持・運営されている。一方、後継者の育成にも注力しており、子ども団員として積極的な教育を行っている。また、この楽団の創設者が教会のオルガン奏者であったことから明らかに、教会と関係が深く、年10回程度ある教会の祝祭時には演奏をしている。同様の楽団は他の自治体にもあり、毎年ヴィップ谷とシュトゥーバイ谷の音楽連盟15団体による音楽祭が行われている。

以上のように、両者はいずれも信仰を背景に誕生し、地域共同体の一翼を担ってきたと見てよい。しかし、中尾歌舞伎の維持・運営は楽観できるものではない。他方、オーバーンベルク楽団は、安定的に継続され、後継者の育成も進んでおり、子どもに対する地域理解教育の点でも機能していると考えられる。

5 考察

統計的検討やオーバーンベルク村の資料が不十分な中で、安易に判断することは慎まなければならないが、本研究では、以下のような推測ができた。

1点目は、両村はともに自然が豊かだといわれているにもかかわらず、住民の自然意識は異なっていることである。すなわち、長谷村の住民はイメージで自然をとらえているのに対して、オーバーンベルク村の住民は具体的にとらえている。この違いの背景には、行きたい旅行先や子どもの遊

び、ハイキングの回答結果から、オーバーンベルク村の住民は、長谷村の住民に比べ日常的な自然との関わりが深いことがあると考えられる。このことに関しては、四手井・菅原らの森林観の国際比較研究が参考になる（四手井・他 1981）⁵⁾。

2点目は、自然との関わり方の違いから生じる自然意識の違いが、村に対する評価の差、すなわち、誇りの程度の差につながっていると考えられることである。実際、回答結果を見ると、オーバーンベルク村の住民は、日常的に関わる教会、山、湖、散策路、牧場などを全体として一つの風景としてとらえ、それを誇りに思い保全しようとしていることは明らかである。先の岡崎の報告（2001）でも、ハイキングや散歩、庭仕事など日常的な自然との関わりが、集落の景観保全に寄与していることが指摘されている。

しかし、地域に誇りを持つということは、単純な話ではない。まず、オーバーンベルク村の場合、チロルには敬虔なカトリック信者が多いといわれ（例えば、岡崎 2001）、今回の調査でも「村の誇り」として、ある女子児童が「教会は世界中に有名」と回答したように、キリスト教の影響は無視できない。すなわち、日常的な自然との関わりに宗教的要因が加わって、地域に対する誇りが具体的により強固なものになっていると考えられる。一方、山村を維持していくためには、経済基盤を確立することが不可欠である。オーバーンベルク村の場合、主産業は牧畜であるが、グリーン・ツーリズムがそれを補完している。日常的に自然に関わることで作り出されてきた自然環境に誇りを持ち、それをグリーン・ツーリズムに結びつけているのである。

3点目は、山村における子どもに対する地域理解教育のためには、何が必要なのかということである。まず、大人が地域に対して誇りを持っていることが不可欠である。しかし、我が国の場合、高度経済成長によって経済的に豊かになったものの、過疎化が進行し、村を維持するために不可欠な地域共同体が崩壊しつつあるという問題を抱えている。そして、給与所得者が増加することで、地域の「共通の価値」が見えにくくなっており、

地域に誇りを持つことは簡単ではない。したがって、地域に誇りを持つためには、何が地域の「共通の価値」なのかを明確にすることが必要であろう。そのような「共通の価値」として、「環境」が考えられる。山村問題は環境問題であり、村づくりは環境保全につながるという「共通の価値」観である。そして、「共通の価値」に基づいた村づくりの「仕掛け」を作ることである。そのような「仕掛け」によって、現代にふさわしい地域共同体が紡ぎ出され、地域に誇りが持てるようになるのではないだろうか。

長谷村の場合、そのような「仕掛け」の一つとして、中尾歌舞伎を位置づけることが考えられる。しかし、保存会会長が危惧しているように、中尾歌舞伎の存続基盤は脆弱である。これは、単純に資金不足の問題ではない。確かに中尾歌舞伎は、山神信仰と結びついて受け継がれてきたが、近代化によって山神信仰は薄らぎ、また、オーバーンベルク村のように「共通の価値」観としての宗教的基盤もない。それだけに、存続基盤の強化のためには、新たな「共通の価値」観によって、歌舞伎を継承する意味を明確にすることが必要であろう。そうすることで、オーバーンベルク楽団のように、子どもに対する地域理解教育の場としての機能も持つと思われる。

付 記

長谷村は、2006年3月31日付で伊那市に編入合併されたが、本稿では調査時の名称を優先し長谷村と表記した。なお、両村の住民、役場職員、学校関係者の皆さんには、資料の提供やアンケートの実施など多大なご協力をいただいた。感謝申し上げます。次第である。

注

- 1) ゲマインデ (Gemeinde) とは、行政の最小単位である。したがって、本稿では「村」と記した。人口規模は数百人程度のものであれば、数千人規模のものもある。岡崎がいう「小規模ゲマインデ」がどの程度の人口規模か不明であるが、オーバーンベルク村と同程度の村を想定

していると思われる。こうした自治体の職員は村長と秘書官の2名程度と少なく、これを補完するシステムが近隣自治体による広域行政であり、オーバンプルク村も分野別に複数の広域行政に組み込まれている。呉羽(2001)によれば、1999年時点のゲマインデ数は、チロル州で279、オーストリア全体で2,359と報告されている。

- 2) 1995年と2005年の国勢調査を見ると、人口は2,314人から2,099人へと9.3%の減少であるが、これは少子高齢化にともなう自然減であることから、住民意識に大きな変化はないと判断した。
- 3) オーストリアの学制では、小学校(Volksschule)は7歳～11歳まで、中学校(Hauptschule)は12歳～16歳までとなっている。オーバンプルクには小学校はあるが、中学校は隣接するグリースにある。2003年のオーバンプルク小学校の児童数は16名、グリース中学校の生徒数は163名である。
- 4) このような調査ではバック・トランスレーション法が定石だと思われるが、今回は時間などの関係で行えなかったため、著者らが原案を作り、信州大学の菅原聡・松田松二名誉教授にもご参加いただき議論を重ね質問票を作成した。なお、自然意識に関する質問では、森林観の国際比較研究(四手井・他 1981)で使われた表現も参考にした。
- 5) この調査によれば、西ドイツ(当時)と日本の森林観には明瞭な違いが認められた。例えば、フライブルクと伊那市の住民を比較した場合、「行きたい旅行先」としてもっとも多く回答されたのは、フライブルクでは「深い森」で55%、伊那では「見晴らしのよい山」で30%だった。また、「好みの自然」では、「人手の加わった自然」がフライブルク82%、伊那60%だった。ところで、「森の中の散歩」については、フライブルク96%、伊那でも80%と大きかったが、一般的に我が国では森林散策という習慣はなく、森林散策をする人がそれほど多いわけではない。すなわち、伊那の回答は、森林内での散歩をイメージでとらえた結果だと見てよい。考察

では、ドイツの住民が森林を生活空間の中におき、森林散策などそこでの生活を楽しむことが多いのに対して、日本人の生活空間の中には一般に森林は位置しておらず、また、自然に対する愛着が不足し感動も弱いと記されている。

引用文献

- Beatrix und Egon Pinzer, 2002, Das Wipptal und seine Seitentaeler, Loewenzahn, Innsbruck-Bozen, Innsbruck.
- 藤本勇二, 2004, 食と農の学びが育む住まい手作り手-子どもと学校から始まるまちづくり-, 環境教育, 14(2), 126-131.
- 池永正人, 2000, オーストリアアルプス・レンゲンフェルト村における山岳観光の発展と山地農民の対応, 新地理, 48(1), 17-36.
- 久保田諒, 2005, 信州・伊那の長谷村に中尾歌舞伎あり, 伊那路, 49(5), 186-198.
- 呉羽正昭, 2001, 東チロルにおける観光業と農業の共生システム, 地学雑誌, 631-649.
- 松田松二, 1998, 環境科学者の見たチロル, 山と溪谷社, 東京.
- Musikkapelle Obernberg, 2003, 175Jahre Musikkapelle Obernberg, Tiroler Bezirkablaetter, Innsbruck.
- 野村卓, 2004, 持続可能な地域における食農教育の射程-環境教育における生活をとおした社会参画の学習-, 環境教育, 14(2), 92-100.
- 太田和利, 1993, 長谷村の人々の森林意識, 南アルプス研究会研究報告, 4, 10-16.
- 太田和利, 2004, 生ゴミの堆肥化による村づくり計画: その環境教育的意味-長野県長谷村での「提言」までの経過から-, 環境教育, 14(2), 15-24.
- 岡崎秀典, 2001, アルプス農村における住民の景観意識と景観保全: オーストリア・チロル州ナッター・ムッター2村の事例から, 地誌研年報, 10, 35-68.
- 四手井網英(研究代表者), 1981, 森林環境に対する住民意識の国際比較に関する研究, トヨタ財団助成研究報告書.